今まで気が付かなかった子どもの接し方

社会福祉学部社会福祉学科 2 年　広浜　佐知子
活動先：NPO 法人　菜の花　放課後児童クラブこどものいえ
クラス：岡　多枝子　先生

1. SL を通しての自分の成長と気づき

6 日間のサービスラーニングの活動を通して、多くの学びを得ることができた。私は、その中でも、「子どもの注意の仕方」「子どものお手本であること」の大切さを学んだ。私がこのサービスラーニングクラスを選んだ経緯から述べていく。

私が、サービスラーニングの授業を選択したのは 1 年生の時のゼミの活動からによる。1 年生のゼミの授業では主に大学や大学近辺の環境について調査を行った。そこでは、様々なことを知るうえでこの知多半島には、福祉施設や NPO 法人がたくさんあることを知り、そこでは一体何を行っているのか、興味を持った。そこで、2 年生のゼミでその NPO 法人の実習をすることができるという内容からサービスラーニングのクラスを受講しようと思った。

私は学童保育の活動に取り組むことになった。こちらでは、小学校 1～6 年生までの子どもたちの夏休みの居場所作りのお手伝いをした。主に、夏休みの宿題や室内や屋外の遊びのお手伝いをした。その中で、私は普段、小学生とのふれあう機会があまりなかったため、どのように接していけばいいのか分からなかった。だからこそ、子どもたちが何を考えているのかを探る必要があった。今までの私は、子どもと楽しく過ごすことで子どもも喜ぶものだと思っていた。しかし、実際はそんなものではなかった。子どもに対して褒めることよりも、注意していくことの大切さを学んだ。子どもは、好奇心旺盛な面があるため、いろんなことにも興味を示す。実習に関して言えば、屋外遊びとして、プールへ移動する時に叢や川沿いの近くを通ることがあり、虫を取ることに夢中になって道路へ飛び出そうとする場面があった。まさか、ここで飛び出そうと私は思っていなかったため驚いた。幸い、車は通っていなかったのだが、これを機に子どもから目を絶対に離してはいけないと思った。また、屋外で移動するのにもかかわらず、虫取りに夢中になってしまって一歩も動かなくなってしまった子もいた。そのようなときに、私はいろんな声掛けをしたのだが、全く耳を貸してくれなかった。夢中になっているものをいかに次の行動へ移させるかのコミュニケーションをとることが難しいなと感じた。しかし、私は気づかないところでコミュニケーションを上手くとっていたことが分かった。それは、私がある一人の子と室内で夢中になって遊んでいたことがあった。そのことで職員の方から後から聞いた話だが、その子はコミュニケーションを上手にとることができない子で、あんなに遊びに夢中な様子はなかなか見たことがないと伺った。こんな私でも微力だが力になれたことがうれしかった。そして、職員さんから「私たちの存在自体が、ただ、そこにいるだけで、周りの人に影響を与えるということ」という言葉をいただいた。これはいい意味でもあるが、また私たち自身が気をつけなければいけないことであることを教えていただいた。それは、私たちが笑顔でいることだけでも、子どもたちにとって支えになっていること。また、私たちの起こす行動によってマネをすることを知った。なので、私たちが子どもたちのお手本と

しての行動や心構えを意識しなければならないことを知った。態度や言葉遣いは特にマネをしやすいことも知った。信頼関係を作ることが大切だと思った。文献の中で「コミュニケーションは人と気持ちをシェアできて、初めて人は自分を信じることができる」ということを学んだ。確かに信頼関係を作ることは簡単ではない。しかし、共に過ごすことだけでも力になると考える。

その他にも、自ら主体として考える企画を立てることの準備の甘さに気づいた。学生企画としては、すぐに準備ができるだろうと思い、あらかじめ練習をしておくことを怠っていた。その影響で反省点が多く挙げられたためである。子どもが体調を崩してしまったり、職員の方に頼りっぱなしになってしまったりしたことがある。前準備の必要さと子どもの健康管理をしっかりすることの大切さを学んだ。

2. 活動を通して見えてきた地域活動や社会活動

サービスラーニングの活動を通して、こちらでは地域との関わりは全くないわけではないことが分かった。もとは菜の花さんには高齢者施設もあることから、活動の初日と 4 日目に訪問をさせていただくことができた。また 4 日目には、こどものいえの子どもたちと一緒に訪問をした。子どもたちは普段、地域の高齢者と関わることがなさそうに見えたため緊張気味であったが、学生企画として考えたお菓子作りのお菓子を持っていき高齢者の方に渡したことや折り紙を共にやったことによって距離が縮まったと思える。この取組も大変良いと考えるのだが、もっと地域の行事に参加してみてもいいのではないかと思えた。どちらかといえば施設内での交流会にも見えたので、今後では地域の夏祭りの行事にこどものいえとして参加することで地域の方とのふれあいもでき、こどものいえとしての認知もされるのではないかと考えたからである。

3. おわりに

今回のサービスラーニングの活動で菜の花の職員の皆さんには大変お世話になりました。活動を通して、子どもとの関わり方を深く学ぶことができました。また、職員の方による活動をするにあたっての改善点を私たちにご指摘いただき、充実した活動になったと思います。この経験を、これからの学びに生かしていきたいと思います。ありがとうございました。

参考文献

久田邦明『子どもと若者の居場所』萌文社　2000 年